特 248
747

十六夜日記 校註

全

安松積 著註校

東京
國民圖書株式會社

始

特 245
747

十六夜日記 校註

全

安松植 著註校

東京
國民圖書株式會社

特248
747

校註者　植松安

校註　十六夜日記全

東京　國民圖書株式會社

はしがき

一、本書は、高等諸學校の教科書にあて、兼ねて一般國文學の自習書として編纂しました。

一、本文は、殘月抄によりました。

一、頭註は、學生や自習者の便を考へ、やゝ多き程度に載せました。

○壁の中より云々　古文孝經を指す。
○みづぐき　岡の屋　辭筆の意で下の書くに續いてゐる。葛葉はかへすがへすの序。
○書きおく跡　爲家の遺書で播磨國細川の庄を爲相に與へるといふ讓り證文の意
○ひじりたち　歌仙等　貫之等を指す。
○二たび敕をうけて　新古今、新敕撰の撰者定家、續後撰、續古今の撰者爲家。
○三人の男子　爲顯、爲相、爲守。
○道　和歌の道。

十六夜日記

昔、壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすがへすも書きおく跡たしかなれども、をおもふ情にもすてらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、猶この愁へこそ、やるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれば、和歌の道は、唯實すくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の石窟ひらけし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、物を和ぐる媒となりにけるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれたりける。さてもまた集を撰ぶ人は、例多かれど、二たび敕をうけて、世々に聞えあげたるは、類なほありがたくやありけむ。その後にしも携はりて、三人の男子ども、百千のうたの古反故どもを、いかなる緣にかありけむ、あづかり持たることあれど、「道を助けよ、子をはぐゝめ、後の世を弔へ。」とて、深き契り

○細川の流れ　爲家の遺書中の細川の庄
○親子の命　阿佛尼母子の命。
○子をおもふ云々　後撰集雅平「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな。」
○東の軍の云々　鎌倉幕府の裁判をいふ
○文屋康秀　康秀が三河に下る時小野小町を誘つた故事。
○住むべき國　在原業平の東下りを指す
○人やりならぬ　人まかせに出来ない。
○目離れせざりつる　目を離さなかつた
○侍從　篤守。
○大夫　爲相。
○ひかしの枕　亡夫爲家卿の枕。

を結びおかれし細川の流れも、故なくせきとめられしかば、跡弔ふ法の燈火も、道をまもり、家を助けむ親子の命も、もろともに消えをあらそふ年月を經て、危く心ほそきものから、何としてつれなく、今日まではながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ捨つれども、子をおもふ心の闇は、猶しのびがたく、道をかへりみる恨みはやらむ方なく、さてもなほ、東の軍の鏡にうつさば、くもらぬ影もや顯はるゝと、せめて思ひあまりて、萬のはゞかりを忘れ、身を盆なきものになし果てて、ゆくりもなくいざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。さりとて、文屋康秀がさそふにもあらず、住むべき國もとむるにもあらず。頃はみ冬立つはじめの、さだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず。嵐に競ふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、往き憂しとても止まるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目離れせざりつる程だに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、慕はしけなる人々の袖の雫も、慰めかねたる中にも、侍從、大夫などの、あながちにうちくつしたる樣、いと心ぐるしければ、さま〳〵言ひこしらへ、闇の中を見れば、むかしの枕さへ、さながら變らぬを見るにも、今更かなしくて、傍に書きつく。

○あだならぬ限りを　必要なものだけを
○和歌の道　和歌の意を示してゐる。
○澤瀉草　歌の草紙。
○よこ笛云々　横笛を題い歌風に譬へ、千鳥を爲相に見做し あとは後鳥と千鳥の足跡とに懸けた。
○よも　よもや。
○三代　俊成、定家、爲家を指して居る。
○迷はまし　迷ふならうが實は迷はない
○昔の人　亡夫爲家卿を指す。
○しほたれぬ　泣いたといふ意。
○そなたの空　鎌倉の方向。
○ものより殊に　他の事よりも一層。

とゞめおくふるき枕の塵をだにわが立ち去らば誰か拂はむ

代々に書きおかれける歌の草紙どもの奥書して、あだならぬ限りをえりしたゝめて、侍從の方へ送るとて、書きそへたる歌、

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草これを昔の形見とも見よ

あなかしこよこ浪かくな濱千鳥ひとかたならぬあとを思はば

これを見て、侍從のかへりごと、いと疾くあり。

つひによもあだにはならじ藻鹽草かたみを三代の跡に殘せば

迷はまし教へざりせば濱千鳥ひとかたならぬ跡をそれとも

この返り事いとおとなしければ、心やすく哀れなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又うちしほたれぬ。大夫の傍去らず馴れ來つるを、振り捨てられなむ名殘、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はる〳〵と行くさき遠く暮はれていかにそなたの空をながめむ

と書きつけたる、ものより殊にあはれにて、おなじ紙に書き添へつ。

つく〳〵と空な詠めそ戀しくば道とほくともはや歸り來む

○山　比叡山延暦寺。
○侍從の兄の律師　鳥羽の異母兄の源承
○あだにのみ云々　訴訟に行つて成功して歸るまでは無益の涙は流すまい。心ゆくは滿足するの意。
○言忌　不吉な言葉を忌み避ける事。
○阿闍梨の君　泰隆。
○立ち添ふぞ云々　立ちは旅衣の縫詰、かたみは互にの意。
○たゞ一人　紀内侍。
○女院　新陽明門院藤位子。
○宮の御かたの云々　姫宮の戀しいといふ事を隱の紀内侍を通して申して置く。
○君　紀内侍。
○極子　二人の子に當へた。

とぞ慰むる。山より、侍從の兄の律師も、出で立ち見むとておはしたり。それもいと心細しと思ひたるを、この手習どもを見て、又書きそへたり。

あだにのみ涙はかけじ旅ごろも心のゆきて立ちかへるほど

とは言忌しながら、涙のこぼるゝを、荒らかに物いひ紛はすも、さまざまに哀れなるを、阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは兄なり。この度の道のしるべに送り奉らむとて、出で立たるめるを、この手習に又まじらはざらむやはとて、書きつく。

立ち添ふぞうれしかりける旅衣かたみに頼むおやのまもりは

女の子はあまたもなし。たゞ一人にて、この近きほどの女院に侍ひ給ふ。院の姫宮一所うまれ給ふばかりにて、心づかひも實しき樣にて、おとなしくおはすれば、宮の御かたの戀しさも、かねて申し置くついでに、侍從、大夫などのこと、はぐくみ育すべき由も、こまかに書きつけて、奥に、

君をこそ朝日とたのめふるさとに殘る撫子霜に枯らすな

と聞えたれば、御返りも細やかに、いとあはれに書きて、歌の返しには、

思ひおく心とゞめば故郷のしもにも枯れじやまとなでしこ

○五人の子ども　泰隆、源承、紀内侍、鳥羽、鳥守の五人。
○をこがまし　馬鹿らしい。
○あはれ　深く心を打たれる事で、悲哀の意はかりでない。
○粟田口　こゝから旅行の記事に入る。
○車　都から乘つて來た牛車。
○野路　近江國粟田郡の地名。
○たのめ　契る。
○うちしぐれ　故郷に時雨の降る里を言ひかけたのである。
○鏡、守山　共に近江國野洲郡の地名。
○いとゞなほ云々　もる山に時雨の濕るをかけた。

とぞある。五人の子どもの歌、のこりなく書きつゞけぬるも、かつはいとをこがましけれど、親の心には、あはれに覺ゆるまゝに書き集めたり。さのみ心よわくては如何とて、つれなく振り捨てつ。粟田口といふ所より車はかへしつ。ほどなく逢坂の關越ゆるほどに、

定めなき命は知らぬたびなれどまたあふ坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は、來しかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝりて、いと物かなしと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

うちしぐれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさき遠き野路の篠原

今宵は、鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮れ果てて行き著かず、守山といふ所にとどまりぬ。こゝにも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけむ間なくしぐれのもる山にしも

今日は十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。いまだ月の光は、かすかに殘りたる曙に、守山を出でて行く。野洲川わたるほど、さき立ちて行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いとふかし。

旅人はみなもろともに朝立ちてこまうちわたす野洲のかはぎり

○小野の宿　近江國坂田郡に在る。
○けぢめ　區別。
○醒が井　近江國坂田郡、有名な泉である。
○うち過ぎましや　その儘通り過ぎはしないだらう。
○わが子ども云々　古今集「みのの國猪の藤川たえずして君につかへむよろづ代までも。」に暗示を得たらしい。
○わたらましやは　渡りはしないだらう
○かきくらしつる雨　空かき曇らして降る雨。
○心より外に　案外に、思ひの外。
○笠縫の驛　美濃國安八郡に在る驛。
○不破　同安八郡。

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとゞまる。月出でて、山の峯に立ちつゞきたる松の木の間、けぢめ見えていとおもしろし。こゝは夜ぶかき霧の迷ひにたどり出でつ。醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、歩人は、猶立ちよりて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなばうき世の夢やさめが井の水

とぞ覺ゆる。

十八日、美濃國關の藤川わたる程に、まづ思ひつゞけける。

わが子ども君につかへむ爲ならでわたらましやは關のふぢ川

不破の關屋の板廂は、今もかはらざりけり。

ひまおほき不破の關屋はこのほどの時雨も月もいかにもるらむ

關よりかきくらしつる雨、時雨に過ぎて降りくらせば、道もいとあしくて、心より外に、笠縫の驛といふ所に、暮れ果てねどとゞまる。

たび人は蓑うちはらふゆふぐれの雨にやどかるかさぬひの里

十九日、又こゝを出でて行く。終夜降りける雨に、平野とかやいふほど、道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞ、さながら渡り行く。明くるまゝに、雨は降らずなりぬ。晝つかた過ぎ行く道に、目に立つ社あり。人に問へば、むすぶの神と聞ゆるといへば、

守れたゞ契りむすぶの神ならば解けぬうらみにわれ迷はさで

洲俣とかやいふ川には、舟を竝べて、眞辟の綱にやあらむ、かけ留めたる浮橋あり。いと危けれど渡る。この川、堤の方はいと深くて、片方は淺ければ、

片淵のふかき心はありながら人目づゝみにさぞせかるらむ

かりの世のゆききと見るもはかなしや身をうき舟を浮橋にして

とぞ思ひつゞけける。また一の宮といふ社を過ぐとて、

一の宮名さへなつかし二つなく三つなき法をまもるなるべし

二十日、尾張國下戸といふ驛を行く、よきぬ道なれば、熱田宮へまゐりて、硯とり出でて書きつけて奉る歌、

いのるぞよ我が思ふことなるみ潟かたひくしほも神のまに〳〵

鳴海がた和歌のうら風へだてずばおなじ心に神も受くらむ

滿つしほのさしてぞ來つる鳴海潟神やあはれとみるめたづねて

○さながら　その儘。
○明くるまゝに　夜の明けるに隨つて。
○むすぶの神　安八郡平野庄にあつて、猿田彦大神を祀る。
○解けぬうらみ　容易に解けぬ訴訟の過。
○眞辟の綱　眞辟の葛で作つた繩。
○人目づゝみに　人目を包み隠す爲にの意で堤に掛けた詞。
○かりの世　佛教では現世をいふ。
○一の宮　尾張國中島郡眞淵田神社。
○二つなく云々　一乘法をいふ、法華經方便品「十方佛土中唯有一乘法無二無三」
○よきぬ道　眞直な道。

○我が行くさき　人生と旅との前途。
○しるべ顔なる　案内する様な。
○あとどめむ　足跡を天下に殘さう。
○都鳥　伊勢物語にある業平の歌で有名である。
○あかざりし　赤と飽との兩意を表す。
○みやこ鳥　都の意を含ませてゐる。
○二村山　三河國碧海郡。
○すゑたどる　野末を辿る。
○さゝがに　蜘蛛の枕詞。
○風につれなき　風の辛くあたる。
○朽葉　褪黄色。
○青地の錦　青の地に赤黄の交つた樹。

雨かぜも神の心に任すらむ我が行くさきのさはりあらすな

鳴海の潟を過ぐるに、潮干のほどなれば、障りなく干潟を行く。をりしも、濱千鳥いと多くさき立ちて行くも、しるべ顔なる心ちして、

濱千鳥鳴きてぞさそふ世の中にあととめむとはおもはざりしを

すみだ川の邊にこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、鵞と足と赤きは、この浦にもありけり。

こと問はむ鵞と足とはあかざりし我が住むかたのみやこ鳥かと

二村山を越えて行くに、山も野もいと遠くて、日も暮れ果てぬ。

はるゞ〳〵と二村山を行き過ぎてなほすゑたどる野邊のゆふやみ

八橋にとゞまらむといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。

さゝがにのくもであやふき八橋をゆふぐれかけて渡りぬるかな

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山とほき原野を分け行く。晝つ方になりて、紅葉いとおほき山に向ひて行く。風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ち交りて、青地の錦を見る心地す。人に問へば、宮路山といふ。

○ちしほ　幾度も染めて色の濃くなること。
○むかし見し　曾て父の度繁朝臣に從つて遠江に來た時のこと。
○あやめ　物の區別　物の筋理、色合等。
○渡津　三河國宝飯郡に在る。
○有明のかゞ　月の出たまゝで夜の明ける事、かゞは月光。
○月のみやこ　京都。
○高師の山　三河と遠江との間にある。
○松のひゞき　松風。
○袖のみなと　筑前にある地名。

しぐれけり染むるちしほの果てはまた紅葉の錦いろかへるまで

この山までは、むかし見し心地するに、ころさへかはらねば、

待ちけりなむかしも越えし宮路山おなじ時雨のめぐり逢ふ世を

山の裾野に竹のある所に、萱屋のひとつ見ゆる、いかにして何のたよりに斯くて住むらむと見ゆ。

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたりさびしき竹のひとむら

日は入り果てて、猶物のあやめも分かぬほどに、渡津とかやいふ所にとゞまりぬ。

二十二日のあかつき、夜ぶかく、有明のかげに出でてゆく。いつよりもものかなし。

住み侘びて月のみやこを出でしかどうき身離れぬありあけのかげ

とぞ思ひつゞくる。供なる人、有明の月さへ笠きたりといふを聞きて、

たび人のおなじ道にや出でつらむ笠うちきたるありあけの月

高師の山も越えつ。海見ゆるほど、いとおもしろし。浦風荒れて、松のひゞきすごく、浪いとたかし。

わがためや浪もたかしの濱ならむ袖のみなとのなみはやすまで

○鳥つ島　島つ島で水鳥の總稱。
○濱名の橋　濱名湖に架けた橋。
○よそならず　よそ事でない。
○みなれて　見馴るゝと水馴るの兩意。
○引馬の宿　遠江國敷智郡に在る地名。
○大方の名　總稱。
○親しと言ひし云々　親しいといふのも名ばかりの人々。
○見し人なみに　見た人がない故に。
○あひしらふ　接待する、もてなす。
○西行が昔　西行物語に西行が此處で武士と同船して難れたといふ故事がある。
○さしかへる　往き還る暇もない。

いと白き洲崎に、黒き鳥の羣れ居たるは、鵜といふ鳥なりけり。

しら濱にすみの色なる島つ鳥筆もおよばば繪に書きてまし

濱名の橋より見渡せば、鵰といふ鳥、いと多く飛びちがひて、水の底へも入る。岩のうへにも居たり。

かもめ居る洲崎の岩もよそならず浪のかけ越すそでにみなれて

今宵は引馬の宿といふ所にとゞまる。この所の大方の名をば、濱松とぞいひし。親しと言ひしばかりの人々なども住む所なり。住み來し人の面影も、さまざまに思ひ出でられて、又めぐり逢ひて見つる命のほども、かへすがへすあはれなり。

濱松のかはらぬかけをたづねきて見し人なみに昔をぞ問ふ

その世に見し人の子孫など、よび出でてあひしらふ。

二十三日、天龍の渡りといふ舟に乗るに、西行が昔も思ひ出でられて、いと心細し。組み合せたる舟たゞ一つにて、多くの人の往來に、さしかへる間もなし。

水の泡のうき世にわたるほどを見よ早瀬の小舟竿もやすめず

今宵は、遠江見付の國府といふところにとゞまる。里あれて物おそろし。傍に水の井あり。

○みつけの里云々　人を見つけるといふ故に恐ろしく思はれる。
○さやの中山　小夜の中山の古名。
○こゞのまゝとかやいふ社　佐野の事任神社、大己貴神を祀る。
○菊川　遠江國佐原郡に在る地名。
○渡らむと云々　やは反語、菊川に問くをかけたのである。
○大井川　遠江と駿河との境にある川。
○おほる川　多いにかける。
○夢にも人を　伊勢物語業平の歌「駿河なる字都の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。」

たれか來てみつけの里と聞くからにいとゞ旅寢の空おそろしき

二十四日、晝になりて、さやの中山越ゆ。ことのまゝとかやいふ社のほど、紅葉いと盛りに面白し。山陰にて嵐も及ばぬなめり。深く入るまゝに、遠近の峯つゞき、こと山に似ず、心ぼそくあはれなり。ふもとの里に、菊川といふ所にとゞまる。

越えくらすふもとの里の夕やみに松風おくるさやの中山

あかつきに起きて見れば、月も出でにけり。

雲かゝるさやのなか山越えぬとはみやこに告げよありあけの月

川音いとすごし。

渡らむと思ひやかけしあづまぢの路にありとばかりはきく川の水

二十五日、菊川を出でて、今日は大井川といふ河をわたる。水いとあせて、聞きしには違ひてわづらひなし。河原幾里とかや、いと遙かなり。水の出でたらむおもかげ、おしはからる。

思ひ出づる都のことはおほる川いく瀬の石のかずもおよばじ

○やんごとなき所　捨て置き難い意から、尊じて貴人を意味する。
○手越　駿河藤川郡。
○某の僧正　不詳。
○さすがに　さうはいふものゝ、矢張り。
○なく〳〵出でし云云　定家の歌、上句「こさとへよ思ひおきつの浜千鳥」
○まくらの障子　枕もとにある障子。
○なほざりに　かりそめに夢見るための假寢であるから、深い契を結んだなどと人に言つてはいけぬみるめは見る目、海松、おきつは興津、置きつにかゝる。

宇都の山越ゆるほどにしも、阿闍梨の見知りたる山伏ゆき逢ひたり。「夢にも人を。」など、昔をわざとまねびたらむ心地して、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくも覺ゆ。いそぐ道なりといへば、文も數多はえ書かず、唯やんごとなき所、ひとつにぞおとづれきこゆる。

我が心うつゝともなし宇都の山ゆめにも遠きむかし戀ふとて

つたかへでしぐれぬひまも宇都の山なみだに袖の色ぞこがるゝ

今宵は、手越といふ所にとゞまる。某の僧正とかやののほり給ふとて、いと人しけし。宿かりかねつれど、さすがに人のなき宿もありけり。

二十六日、藥科川とかや渡りて息津の濱にうち出づ。「なく〳〵出でし跡の月影。」など、まづ思ひ出でらる。畫立ち入りたる所に、あやしき黄楊の小枕あり。いと苦しければ、うち臥したるに、硯も見ゆれば、まくらの障子に、臥しながら書きつけつ。

なほざりにみるめばかりをかり枕むすびおきつと人に語るな

暮れかゝるほど、清見が關を過ぐ。岩越す浪の、白き衣をうち著たるやうに見ゆる、いとをかし。

○夜の宿云々　白氏文集卷三「夜宿鴈塞詩」
○かゝる　涙の掛かると斯かると言ひかけた詞。
○父の朝臣　平度繁。
○いかになるみの　「さてもわれ如何になるみの浦なれば思ふ方には遠ざかるらむ。」
○古今の序の詞「高き山も麓の塵ひぢよりなりて天雲たなびくまでおひ上れる如く云々。」
○雪さへたかき山　雪さへ積る程の高山
○朽ちはてし云々　古今の序に「今はふじの山も煙たゝずなり、ながらの橋もつくるなり云々。」

きよみがた年ふる岩にこと問はむ浪のぬれ衣いくかさね著つ

ほどなく暮れて、その邊の海ちかき里にとゞまりぬ。浦人の所爲にや、鄰よりくゆりかゝる煙、いとむつかしきにほひなれば、「夜の宿なまぐさし。」といひける人の詞も思ひ出でらる。よもすがら風いと荒れて、浪たゞ枕のうへに立ちさわぐ。

ならはずよ他所に聞き來し清見潟あらいそ浪のかゝるねざめは

富士の山を見れば、煙も立たず。むかし父の朝臣に誘はれて、「いかになるみの浦なれば。」など詠みしころ、遠江の國までは見しかば、「富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを、いつの年よりか絶えし。」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

誰が方になびきはててか富士の嶺の煙のすゑの見えずなるらむ

古今の序の詞まで思ひ出でられて、

いつの世の麓の塵か富士の嶺を雪さへたかき山となしけむ

今宵は、浪の上といふ所に宿りて、荒れたる音、更に目もあはず。

朽ち果てし長柄の橋をつくらばや富士の煙も立たずなりなば

二十七日、明けはなれて後、富士川わたる。朝川いとさむし。數ふれば十五瀨をぞ渡り

○心から下り立つ　自分から進んで海中に入る事ゆゑ、たとひ衣の濡れる事は常であるが、濡きぬ袖みな人に言つてはならぬ。
○三島の明神　伊豆國賀茂郡に在つて大山祇神を祀る。
○しきしまの道　歌道をいふ。
○山のかひ　峡、甲斐にかけた詞。
○ゆかしさよ　慕しきをよそにした足柄山のゆかしさよの意山の名に慕しきをかけた。
○さかしき山　險しい山。

ぬる。

さえわびぬ雪よりおろす富士川のかは風こほる冬のころも手

今日は、日いとうらゝかにて、田子の浦にうち出づ。海士どもの漁するを見ても、

心から下り立つ田子の蜑ごろもほさぬうらみと人に語るな

とぞ言はまほしき。伊豆の國府といふ所にとゞまる。いまだ夕日のこるほど、三島の明神へ參るとて、詠みて奉る。

あはれとや三島の神の宮柱たゞこゝにしもめぐり來にけり

おのづからつたへしあともあるものを神は知らむしきしまの道

尋ね來てわが越えかゝる箱根路を山のかひあるしるべとぞ思ふ

二十八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、

たまくしけ箱根の山をいそげどもなほ明けがたきよこ雲の空

足柄山は道とほしとて、箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよそなたの雲をそばだててよそになしぬる足柄の山

いとさかしき山を下る、人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。からうじて越えは

○落鹿木　鹿を落る時の詞。
○丸子川　相模にあつて今の酒匂川のこと。
○鎌倉　當時幕府の在つた所。
○いとほそき月　三日月の樣に細い月。
○あま小舟　海士の乘つた小船。

てたれば、又麓に早川といふ河あり。まことに早し。木の多く流るゝを、「いかに。」と問へば、「海士の藻鹽木を、浦へ出さむとて流すなり。」といふ。

あづま路の湯坂を越えて見わたせばしほ木ながるゝ早川の水

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、とまるべき所とほし。伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を、「いづことかいふ。」と問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

海士の住む其の里の名もしらなみの寄する渚に宿やからまし

丸子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとゞまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

二十九日、酒匂を出でて、濱路をはるゞと行く。明けはなるゝ海づらを、いとほそき月出でたり。

浦路行く心ほそさを浪間より出でて知らするありあけの月

渚に寄せかへる浪のうへに霧たちて、數多ありつる釣舟見えすなりぬ。

あま小舟漕ぎ行くかたを見せじとや浪に立ちそふ浦のあさぎり

都とほく隔たり果てぬるも、なほ夢の心地して、

○世もうき涙　世もによもやの意を含む
○昔の人　爲家郷を指してゐる。
○東にて　鎌倉で。
○山寺　極樂寺。
○ありし御返しとおほじくて　前に選し上ひた歌の御返事と思はれて。
○後れぬ形見　殘る記念物。
○空にうかれし云々　阿佛尼が都を後に旅立つたのを月が空にうかれ出るのに譬へて言つたのである
○前右兵衛督　爲家の二男爲敎。
○御女　爲子。
○大宮院　後嵯峨天皇の后藤原の姞子。
○權中納言　爲子の事。

立ち離れ世もうき浪はかけもせじ昔の人のおなじ世ならば

東にて住む所は、月影の谷とぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺の傍なれば、のどかにすごくて、浪の音、松の風絶えず。都のおとづれいつしかに、おぼつかなきほどにしも、宇都の山にて行き逢ひたりし山伏のたよりに、言づけ申したりし人の御許より、たしかなる便りにつけて、ありし御返しとおほしくて、

旅ごろも涙をそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらむ

ゆくりなくあくがれ出でしいざよひの月や後れぬ形見なるべき

都を出でし事は、十月十六日なりしかば、いざよふ月をおほしめし忘れざりけるにやと、いとやさしくあはれにて、唯この返り事ばかりをぞ又きこゆる。

めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく空にうかれしいざよひの月

前右兵衛督の御女、歌よむ人にて、敕撰にもたびたび入り給へり。大宮院の權中納言ときこゆる人、歌のことゆゑ朝夕まうし馴れしかばにや、道のほどのおぼつかなさなど、おとづれ給へる文に、

はるばると思ひこそやれ旅衣なみだしぐるゝ程やいかにと

○爲家の君　爲敎卿の子。
○式乾門院　後高倉院の皇女利子。
○御櫛笥殿　女官の呼び名。
○久我云々　通光公。
○打聞　聞いた歌を書き集めた歌集。
○安嘉門院　邦子と申され後鳥羽院の妃殿に在します。
○御かた　何殿といつた樣な尊稱である
○まかりまうし　別れの挨拶。
○北白川殿　安嘉門院の御在所。
○消えかへり云々　氣が滅入つて眺めながら物思ひする。
○ほとは雲居ぞ　都からの道程は遙かか

かへりごとに、

おもひやれ露もしぐれもひとつにて山路わけこし袖のしづくを

この兄の爲家の君も、おなじ樣におぼつかなさなど書きて、

ふるさとは時雨に立ちし旅衣雪にやいとゞ冴えまさるらむ

かへし、

旅衣うらかぜ冴えてかみな月しぐるゝ空にゆきぞ降りそふ

式乾門院の御櫛笥殿と聞ゆるは、久我の太政大臣の御女、これも續後撰よりうち續き、二たび三たびの家々の打聞にも、歌あまた入り給へる人なれば、御名も隱れなくこそ。今は安嘉門院に、御かたとて侍ひ給ふ。東路おもひ立ちし明日とて、まかりまうしの由に、北白川殿へ參りしかど、見えさせ給はざりしかば、今宵ばかりの出立、物さわがしくて、かくとだに聞えあへず、いそぎ出でしにも、心にかゝりて、晉信きこゆ。草の枕ながら年さへ暮れぬる心ほそさ、雪のひまなさなど書きあつめて、

消えかへりながむる空もかきくれてほとは雲居ぞ雪になりゆく

など聞えたりしを、立ちかへりその御返り事、

○御方違への行幸　中御門の方を忌んで方向を途へての行幸。
○峯殿　光明峯寺關白藤原道家公。
○かゝる事ども　阿佛尼の來訪を指す。
○なぞや云〻　どうして御來訪の趣を前以てお知らせ下さらなかつたのか。
○ひとかた　尋常、通例の意。
○おしはかりの御返り事　前出阿佛尼の「雪になりゆく」を推量した歌の御返事。
○便りあり　都への ついでのある。
○姉君　中院中將の上ども三位入道ども
○妹　昔は男女通じて共に「おさうと」と調む。

便りあらばと心がけ參らせつるを、今日は十二月の二十二日、文待ちえて珍しくうれしさ、まづ何事も、こまかに申したく候に、今宵は御方違への行幸の御うへとて、まぎるゝ程にて、思ふばかりもいかゞと本意なうこそ。御旅明日とて、御參りありける日しも、峯殿の紅葉見にとて、若き人々さそひにし程に、後にこそかゝる事ども聞え候ひしか。などや、斯くとも御尋ね候はざりし。

ひとかたに袖やぬれましたび衣たつ日をきかぬうらみなりせば

さてもそれより、雪になりゆくと、おしはかりの御返り事は、

かきくらし雪ふる空のながめにもほどは雲ゐのあはれをぞ知る

とあれば、このたびは又、立つ日を知らぬとある、御返しばかりをぞ聞ゆる。

心からなに恨むらむ旅ごろもたつ日をだにも知らずがほにて

あかつき便りありと聞きて、終夜起き居て、都の文ども書く中に、殊にへだてなく、哀れにたのみかはしたる姉君に、をさなき人々のこと、さま〴〵に書きやる程、例の浪風はげしく聞ゆれば、只今あるまゝの事をぞ書きつけける。

夜もすがらなみだも文もかきあへず磯越す風にひとり起き居て

○めかり　海草を刈る。
○あま人　尼ど海士にかけた詞。
○姉妹、兄弟、姉妹共に「おとゝひ」と調む。
○うへ　妻。
○おなじ世ながら云々　同じ現世ながら俗界を捨てて僧道に入つた人である。
○なか〳〵　却つて
○つゝましくする事　慎み愼つて謹す位にすべき事。
○たど〳〵しさ　ぼんやりとしてゐるのをいふ。
○いざよふ月　前の「ゆくりなく慕れ出でし十六夜の月やおくれぬかたみなるべき。」

又おなじさまにて、故郷には戀ひしのぶ妹の尼上にも、文たてまつるとて、磯物などのはし〴〵も、いさゝか包みあつめて、

いたづらにめかりしほ焼くすさびにも戀しやなれし里のあま人

ほど經て、この姉妹二人の返り事、いとあはれにて見れば、姉君、

たまづさを見るに涙のかゝるかな磯越すかぜは聞くこゝちして

この姉君は、中院の中將ときこえし人のうへなり。今は三位入道とか。おなじ世ながら遠ざかりはてて、おこなひ居たる人なり。その妹の君も、めかりしほやくとある返り事、さま〴〵に書きつけて、人戀ふる涙のうみは都にも枕の下に湛へてなどやさしく書きて、

もろともにめかり鹽焼く浦ならばなか〳〵袖になみはかけじを

この人も安嘉門院に侍ひしなり。つゝましくする事どもを、思ひつらねて書きたるも、いとあはれにもをかし。ほどなく年暮れて、春にもなりにけり。霞こめたる眺めのたど〳〵しさ、谷の戸はとなりなれども、鶯の初音だにもおとづれ來ず。思ひなれにし春の空は忍びがたく、昔の戀しきほどにしも、また都の便りありと告げたる人あれば、例の所々への文書く中に、いざよふ月とおとづれ給へりし人の御許へ、

○涙のよる〳〵　寄ると夜とをかけた詞
○そこはかとなき　取り止めのない。
○寝られじた　なは歎辭、ねられまいなあの意。
○まぎる・事なく　熱心に、專心一意、
○名草の濱云々　この濱は紀伊國にあつて貝の産地、名草に慰める意、なき心地に貝のない事から甲斐のないといふ意を示して居る。
○碎くる　心を苦しめる。
○花の面影に立つ　花と思はれる樣に立ち上り。
○書きさす　書きかけてやめる、書き殘さない。

おほろなる月はみやこの空ながらまだ聞かざりし浪のよる〳〵など、そこはかとなき事どもを書き聞えたりしを、たしかなる所より傳はりて、御返り事をいたうほども經ず、待ち見たてまつる。

寝られじな都のつきを身にそへてなれぬまくらの浪のよる〳〵

權中納言の君は、まぎるゝ事なく、歌を詠みたまふ人なれば、このほど手習にしたる歌ども、かき集めてたてまつる。「海ちかき所なれば、貝などひろふ折も、名草の濱ならねば猶なき心地して。」など書きて、

いかにしてしばし都を忘れ貝なみのひまなくわれぞ碎くる

知らざりしうらやま風も梅が香はみやこに似たる春のあけほの

はなぐもりながめてわたる浦風にかすみたゞよふ春の夜の月

あづま路の磯やま風のたえ間よりなみさへ花の面影に立つ

みやこ人思ひも出でばあづま路の花やいかにと音づれてまし

など、たゞ筆にまかせて思ふ儘に、急ぎたる使として、書きさすやうなりしを、又程經ず返り事し給へり。「日頃のおほつかなさも、この文に、かすみ晴れぬる心地して。」などあり。

○晴れぬこゝろ　思ひ　した心。
○わか〳〵しき　或本にはわな〳〵しきとあるから震へる意味ととつてよからう
○慰寄　おこり。
○日交　隔日。
○しをれ果てたる　衰弱し切つた。
○法華經　天台宗、法華宗の經文で八卷より成つてゐる。
○落ちたる　快癒した。
○かゝる事　病氣に罹つた次第。
○誰かは見まし　誰も見ない、かはは反語。
○消えもせじ云々　歌道に多年の功あるあなたが空しく死なれる事はあるまい。

頼むぞよしほひに拾ふうつせ貝かひある浪の立ちかへる世を

くらべ見よ霞のうちの春の月晴れぬこゝろは同じ眺めを

しら浪のいろもひとつに散る花を思ひやるさへおもかけに立つ

東路のさくらを見てもわすれずば都のはなを人や問はまし

三月の末つ方、わか〳〵しき癒病にや、日交におこること、二たびになりぬ。怪しうしをれ果てたる心地しながら、三度になるべき曉より起き居て、佛の御前にて、心を一つにして法華經を讀みつ。そのしるしにや、名殘なくも落ちたる折しも、都の便りあれば、かゝる事こそなど、故郷へも告げやる序に、例の權中納言の御許へ、

旅の空にて、危きほどの心細さも、さすが御法のしるしにや、今日まではかけとゞめて。

と書きて、

いたづらに海士の鹽やくけぶりとも誰かは見まし風に消えなば

と聞えたりしを、驚きて返り事疾くし給へり。

消えもせじ和歌のうら路に年を經て光を添ふるあまのもしほ火

○妙なる法の道　妙法蓮華經。
○見し世　去年見た京都の樣子。
○たちかへて　裁ち換へて。
○ありしにも　昔にも。ありしは常に過去を意味してゐる。
○官方の中將　宮廷中將藤原實方、一條天皇の御時行成を打つて歌枕見て參れとて陸奥守に左遷された有名な歌人。
○陸　逢坂の關。
○やさしく　優にあはれ深い。
○ほのかにも云々　微かに時鳥の初音を聞く望みも絶えた。

御經のしるし、いと貴くて、

たのもしな身にそふ友となりにけり妙なる法のはなの契りは

四月の初めつかた便りあれば、又同じ人の御許へ、「去年の春夏の戀しき。」など書きて、

見し世こそ變らざるらめ暮れ果てて春より夏にうつる梢も

夏ごろもはやたちかへて都人いまや待つらむ山ほとゝぎす

そのかへし又あり。

草も木も去年見しまゝに變らねどありしにも似ぬ心地のみして

さて郭公の御たづねこそ、

人よりも心つくしてほとゝぎすたゞ一聲を今日ぞ聞きつる

實方の中將の、五月まで郭公聞かで、陸奥より、

都には聞きふるすらむほとゝぎす關のこなたの身こそつらけれ

とかや申されたることの候なる。その例と思ひ出でられて、この文こそ、殊にやさしく。

など書きておこせたまへり。さるほどに、四月の末になりければ、郭公の初音、ほのかにも思ひ絶えたり。人づてに聞けば、比企谷といふ所に、あまた聲鳴きけるを、人聞きたり。などいふを聞きて、

○比企の谷　鎌倉妙本寺の附近を言ふ。
○しのび音云々　比企を偽いに言ひかけて、訴訟の聽かれるのを待ち佗びる心地を含めてゐる。
○ひとすぢに　全く。
○人別き　人に依つて差別的待遇する事
○和德門院　九條藤原の姫君義子內親王
○深草の前齋宮　後鳥羽天皇の皇女雅子內親王。
○うき身こがるゝ　繪後撰集「濁江にうき身こがるゝ・蘆刈舟果ては往來の影だにも見ず。」
○さる人の子　立派な身分の人の子。
○子をおもふ鶴　阿佛尼を譬へたもの。

しのび音は比企の谷なるほとゝぎす雲ゐに高くいつかなのらむ

など一人思へども、そのかひもなし。もとより東路は、道の奥まで、昔より郭公まれなる習ひにやありけむ、ひとすぢに又鳴かずばよし。稀にも聞く人ありけるこそ、人別きしけるよと、心づくしに恨めしけれ。又和德門院の新中納言と聞ゆるは、京極中納言定家の御女、深草の前齋宮と聞えしに、父の中納言のまゐらせ置き給へる儘にて、年經たまひにける。この女院は、齋宮の御子にしたてまつり給へりしかば、傳りてさぶらひ給ふなり。「うき身こがるゝ藻刈舟。」など詠み給へりし民部卿の典侍の兄人にてぞおはする。さる人の子にて、あやしき歌よみて、人には聞かれじと、あながちにつゝみ給ひしかど、はるかなる旅の空のおほつかなさに、哀れなる事どもを書きつゞけて、

いかばかり子をおもふ鶴の飛びわかれ習はぬ旅の空に鳴くらむ

と文の詞につゞけて、歌のやうにもあらず。書きなし給へるも、人よりは、なほざりならす覺ゆ。御返り事は、

○故人道大納言　亡夫爲家卿をいふ。
○おもひ寝　人を想ひながら寝ること。
○人のおもかゆ　爲家卿の姿。
○さしも　つまらぬ歌だと言つてあれほどまで。
○志賀の浦浪たち　この浦は近江にある浪立ちは騒動の意。
○山　比叡山延暦寺。
○三井寺　單に寺ともいつて園城寺の事
○覺束なし　氣づかはしい。
○侍從の宰相の君　爲相を指す。
○點あひ　いい歌に點を入れること。合點はこれから出た。
○餝目　開遂つた見方。

それゆゑに飛び別れても蘆田鶴の子を思ふかたは猶ぞ悲しき

と聞ゆ。その序に、故入道大納言、草の枕にも立ち添ひて、夢に見えさせ給ふよしなど、この人ばかりや哀れとも思さむとて、書きつけて奉る。

都までかたるも遠しおもひ寝に忍ぶむかしの夢のなごりを

はかなしや旅寝の夢にまよひ來てさむれば見えぬ人のおもかけ

など書きて奉りしを、又あながちに便り尋ねて、返り事したまへり。「さしも忍び給へりしも、をりからなりけり。

あづま路の草のまくらは遠けれどかたれば近きいにしへの夢

いづくより旅寝のゆかにかよふらむ思ひおきつる露をたづねて」

など宣へり。夏のほどは、あやしきまで音信も絶えて、覺束なさも一方ならず。都のかたは、志賀の浦浪たち、山、三井寺のさわぎなど聞ゆるも、いとゞ覺束なし。辛うじて、八月一日ぞ使待ち得、日ごろよりおきたりける人々の文ども、とり集めて見つる。侍從の宰相の君の許より、五十首の和歌を詠みたりけるとて、清書もしあへずくだされたり。歌もいとをかしくなりにけり。五十首に、十八首點あひぬるも、怪しく、こゝろの闇の餝目こそあるらめ。その中に、

心のみ隔てずとてもたびごろも山路重なるをちのしら雲

とある歌を見るに、旅の空を思ひおこせて詠まれたるにこそはと、心を遣りてあはれなれば、その歌の傍に、文字ちひさく返り事をぞ書き添へてやる。

戀ひしのぶ心やたぐふあさゆふに行きてはかへるをちの白雲

又おなじ旅の題にて、

かりそめの草の枕の夜な〳〵を思ひやるにも袖ぞつゆけき

とある所にも、また返り事をぞ書き添へたる。

あきふかき草のまくらに我ぞ泣くふり捨てて來し鈴蟲の音を

又、この五十首の歌の奥に、詞を書き添ふ。大方歌のさまなど記しつけて、奥に、むかしの人の歌、

これを見ばいかばかりかと思ひつる人に代りてねこそ泣かるれ

と書きつく。侍從の弟爲守の君の許よりも、三十首の歌をおくりて、「これに點あひて、惡からむ事を、細かにしるしたべ。」といはれたり。今年は十六ぞかし。歌のくちなれば、

○心を遣りて　思ひやつて。
○たぐふ　副ひ並ぶ意。
○をち　遠方。
○かりそめの云々　短い旅行中の夜毎の寂しさを想ひやるにつけても同情の涙を抑へ得ない。
○ふり捨てて　子を涙して來た事を鈴蟲の音を振るに言ひかけた詞。
○むかしの人　爲家卿。
○ねこそ泣かるれ。泣く事を昔古く言を泣くと言つた。
○今年は十六ぞかし　爲守を指す。十四の誤りだらうといふ說もある。

○歌のくち　歌の詠みはじめ。
○立ち別れ　立ち、煙、細、そひなどは皆この錬語である。
○子を思ふ思ひ　おもひのひに火の意を含ませてある。
○あづま路の云々　東國にあるなつかしいあなたを偲ぶよすがと思ふ月までが涙に曇つてしまふ。
○しきしまの　もとは大和の枕詞、轉じて日本全國を指す時にも用ひる。
○やまとの國　日本全國を指す。
○あめつちの云々　神代記にある天地開闢の事。
○うたひてし　ためしに續く。

やさしく覺ゆるも、かへす〳〵心の闇と、かたはらいたくなむ。これも旅の歌には、こなたを思ひて詠みたりけりと見ゆ。下りしほどの日記を、この人々の許へ遣したりしを、詠まれたりけるなめり。

立ち別れ富士のけぶりを見てもなほ心細さのいかに添ひけむ

又、これも返しを書きつく。

かりそめに立ち別れても子を思ふ思ひを富士の煙とぞ見し

また權中納言の君、こまやかに文書きて、

くだり給ひし後は、歌よむ友もなくて、秋になりては、いと〻思ひ出で聞ゆる僧に、ひとり月をのみ眺めあかして。

など書きて、

あづま路の空なつかしきかたみだに忍ぶ涙にくもる月かげ

この御返り事、これも故郷の戀しさなど書きて、

かよふらしみやこの外の月見ても空なつかしきおなじ眺めは

都の歌ども、この後おほく積りたり。又書きつくべし。

○ひじりの御世の　聖帝の御政道。
○人の心をたねとして　以下五句は古今集の序文「やまとうたは人の心をたねとして萬の言の葉とぞなれりける云々」に依つたもの。
○よつの海　四海。
○きみ〻　御歴代の天皇。
○和歌のうら路の　下三句は敕撰和歌集の多い事をいふ。
○三代　俊成、定家、爲家。
○そのまことさへ　爲家卿の誠り渡しの實證
○おもへば云々　賤しい賤の我が子故土地を離はれたとの意

しきしまのやまとの國はあめつちのひらけはじめし
むかしよりいはとをあけておもしろきかぐらのことば
うたひてしされば かしこきためしとて ひじりの御世の
道しるくたねとして よろづのわざを
ことの葉になびくめり 八島のほかの
よつの海をさまりて そら吹くかぜも
やはらかに浪もしづかに時さだまれば
きみ〻の枝も鳴らさず降るあめも
もしほ草御言のまゝにしたがひて
名をとめて書きあつめたる あとおほし
ゆづりてし三代まで繼ぎし それが中にも
信濃なるそのまことさへ 人の子の
とがとてやそのはゝきゝ木の ありながら
ちぎり置く世にもつかへよ おもへばいやし
そのはらに生ける世の たねを蒔きたる
須磨と明石の つゞきなる 身をたすけよと
ほそ川やまの

○よるの鶴　阿僧尼自身を指す。
○ことの葉　杖に言ひかゝる。
○梅のはな　春の縁語
○さゝがに　いにかかる枕詞、いは蜘蛛の巣をいふ。
○世々のあとある　一家相伝の歌書。
○あしはらのみち　和歌の道。
○行くさきかけて　將來の事を慮つて。
○たゞすのもり　山城國愛宕郡にある神社、糺すの意を含めて用ひた。

山がはの　わづかにいのち　かけ樋とて　つたひし水の
みなかみも　せき止められて　いまはたゞ　くがにあがれる
魚のごと　かぢを絶えたる　ふねのごと　寄るかたも無く
侘びはつる　子をおもふとて　よるの鶴　泣く〳〵みやこ
出でしかど　身は數ならず　かまくらの　世のまつりごと
しければ　きこえあげてし　ことの葉も　えだにこもりて
梅のはな　四とせの春に　なりにけり　行くへも知らぬ
なかぞらの　かぜにまかする　ふるさとは　のき端も荒れて
さゝがにの　いかさまにかは　なりぬらむ　世々のあとある
たまづさも　さて朽ち果てば　あしはらの　みちもすたれて
如何ならむ　これを思へば　わたくしの　なげきのみかは
世のためも　つらきためしと　なりぬべし　行くさきかけて
さま〳〵に　書きのこされし　筆のあと　かへす〳〵も
いつはりと　おもはましかば　ことわりを　たゞすのもりの

○ゆふしで　木綿巻。
○蹤はあとなく　新敕撰「世の中に蹤は跡なくなりにけり心の使の蓬のみして。」
○そのよ　昔の世。
○のこるよもぎ　俊成卿の歌、後に出てゐる。
○かゝりけり　かくありけりの意。
○野なかの清水　播磨國印南野に在る。
○たゞこほりなき云云　確實な證書の意。
○いとゞしく　愈々。
○鶴が岡　鎌倉幕府の事。

ゆふしでに　やよやいさゝか　かけて問へ　みだりがはしき
すゑの世に　麻はあとなく　なりぬとか　いさめ置きしを
わすれずば　ゆがめることを　また誰か　引きなほすべき
とばかりに　身をかへりみず　たのむぞよ　そのよを聞けば
さてもさは　のこるよもぎと　かこちてし　ひとのなさけも
かゝりけり　おなじ播磨の　かこちてし　ひとつながれを
汲みしかば　野中の清水　さかひとて　もとのこゝろに
まかせつゝ　とゞこほりなき　よどむとも　あとさへあらば
いとゞしく　鶴が岡べの　みづぐきの　八千代の光
さし添へて　あきらけき世の　あきらけき世の　なほも榮えむ
長かれと朝夕いのる君が代を　やまとことばに今日そのべつる

のこる蓬とかこちけるといふ所の裏書に、皇太后宮の大夫俊成卿の御女、父のゆづり

とて、播磨の國越部の庄といふ所をつたへ知られけるを、地頭のさまたけ多くて、むかし武藏の前司へ、ことなる訴訟にはあらで、まゐらせられける歌、新敕撰にも入りて侍るとやらむ。「心のまゝの蓬のみして。」といふ歌を、かこちて申されける歌、

君ひとりあとなき麻のみを知らば殘るよもぎが數をことわれ

と詠まれければ、評定にも及ばず、二十一ヶ條の地頭の非法を、皆とゞめられて候ひけり。その後、野中の清水を過ぐとて、

忘られぬもとの心のありがほに野中の清水かげをだに見し

と詠まれたるも、その越部の庄へ下られける時の歌にて候、新敕撰に入りて侍りし。

永仁六年三月一日書之

この阿佛房と申す人は、定家の息爲家の室なり。きんだち五人ましゝ候。播磨の國細川の庄を、爲家より讓り置かれ候を、爲氏他腹によりて押領候訴訟のために、鎌倉へ下られ候時の道の日記にて候。爲氏も陳狀のために、鎌倉へ下向、兩人ともに、鎌倉にて死去せられし。訴訟は爲氏のかたへは附けられず候ひしとぞ。阿佛は安嘉門院の四條と申す人なり。爲相の母なり。

○裏書　卷物等の裏に認めてある添書。
○つたへ知られけるを　代々所領してをつた。
○地頭　鎌倉の時に置いた土地管理者。
○武藏の前司　泰時。
○ことなる訴訟云々　別に訴訟らしくはなく。
○新勅撰　後堀河天皇の御時定家の撰した歌集。
○藤のみ　藤の實に藤の如く正しい我が身の意をかけた。
○ことわれ　善惡を糺す。
○評定　役人の會議。
○非法　不正の行爲。
○忘られぬ云々　忘るべからざる本心があると見えて地頭の不正も今は少しもない。
○かゲをだに見し　影をさへ見た。
○新勅撰　續古今の誤である。
○永仁六年　伏見天皇の御代、弘安三年より十八年後である

十六夜日記　終

昭和四年三月二十日印刷
昭和四年三月廿二日發行

校註十六夜日記全　（定價三十錢）

校註者　東京府下高田町雜司ヶ谷鼬原一番地　植松安
發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座（七二一八三番　三六八八六番）
振替東京五二二九八番

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 **古事記全** 原文及び假名混文 定價一圓四十錢 送料十八錢

日本女子大學教授 石川佐久太郎先生校註 **竹取物語全** 定價三十錢 送料四錢

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 **大和物語全** 定價七十錢 送料六錢

東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生校註 **堤中納言物語全** 定價五十錢 送料四錢

東京帝大助教授 植松安先生校註 **土佐日記全** 定價三十錢 送料四錢

日本女子大學教授 石川佐久太郎先生校註 **蜻蛉日記全** 定價一圓 送料六錢

東洋大學教授 長連恒先生校註 **紫式部日記全** 定價五十錢 送料四錢

東京高等師範教授 玉井幸助先生校註 **更級日記全** 定價五十錢 送料四錢

國學院大學教授 山崎麓先生校註 **徒然草全** 定價八十錢 送料六錢

同 校註 **方丈記全** 附彰考館本方丈記 定價三十錢 送料四錢

東京女子高等師範教授 佐伯常麿先生校註 **平家物語全** 定價二圓 送料十八錢

東京女子高等師範教授 金子彦二郎先生校註 **落窪物語全** 定價一圓二十錢 送料八錢

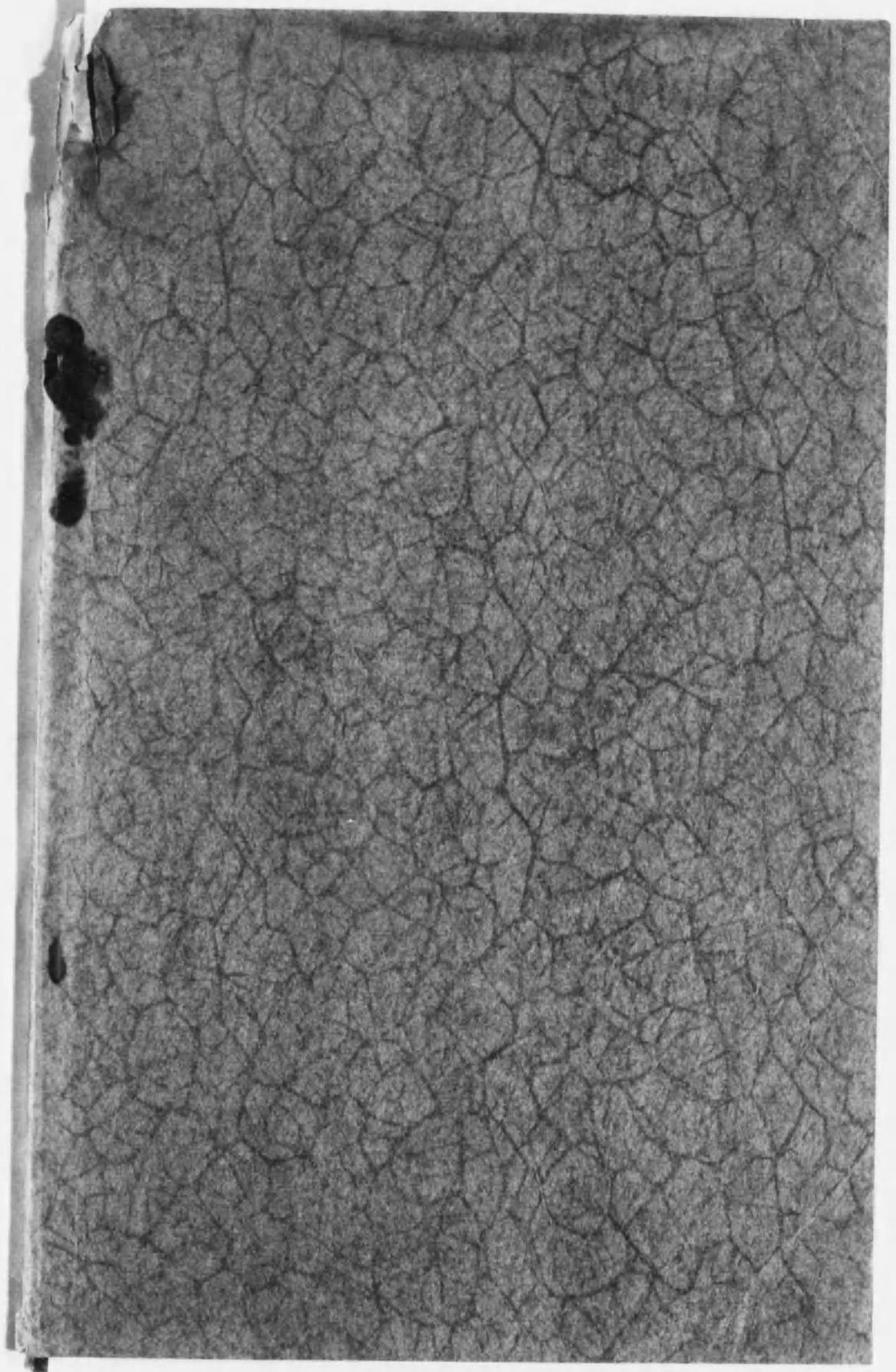
中央大學教授
沼波守先生校註　源氏物語一　自桐壺　至明石　定價一圓四十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語二　自澪標　至藤裏葉　定價一圓五十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語三　自若菜　至雲隱　定價一圓四十錢　送料十八錢

同　校註　源氏物語四　自匂宮　至夢浮橋　定價一圓七十錢　送料十八錢

日本女子大學教授
石川佐久太郎先生校註　大鏡全　定價一圓三十錢　送料十八錢

同　校註　增鏡全　定價一圓三十錢　送料十八錢

終